

2022. 2. 13. 主日礼拝説教  
聖書：マルコによる福音書7章31～37節  
『聞こえること、話せること』

本日の箇所は、31節に「ティルスの方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通り抜け、ガリラヤ湖へやって来られた」と描き出されます。つまり、ユダヤから見て「異邦の地」をぐるりと一回りして来られたということです。マルコはこのオリジナルの記事に際して、最初に場所を強調するのは「異邦の地」での働き

の総括として初代教会の位置づけを試みたのです。  
ローマの信徒への手紙15章7節以下に「福音はユダヤ人と異邦人のためにある」という小標題の記事があります。初代教会はこのパウロの言葉に励まされて「異邦人伝道」が福音の一部などではなく、福音そのものであることを「追体験」するのです。

32節に登場するのは「耳が聞こえず舌の回らない人」でした。まさにその人がイエスによって癒されてゆくのです。

当時、こういった奇跡物語や治癒物語は初代教会の中にたくさん伝承されていたのでしょ

う。マルコはそれらの中からいくつかをこのように場所を設定しながら初代教会の歩みを構成してゆきました。  
それでは初代教会の働きとは何だったのでしょうか。パウロ以前の初代教会は、まだ復活信仰共同体という程度の集まりだったのですが、その働きはユダヤ教社会の中で「置き去り」にされた人々への支援・介護・治療等の活動でした。特に福音書には病気や障がいを持つ人々の記事がたくさん述べられているように、行為としては地道な介護活動が主流だったようです。

毎日が同じことの繰り返し。これが介護の実態であることは今も昔も変わることはありません。しかし、初代教会はその行為のただ中で福音の質を獲得して行ったのです。それは介護する側もされる側も共に「あなたは赦されている」という、もう一つの現実への気づきでした。介護の結果が絶望の連続で終わらないようにという、もう一つの事実が必要だったのです。ここに福音というキリスト・イエスの出来事が成立してゆくのです。

つまり、ユダヤ教は「罪の根源を問う」のです。しかし、福音は「罪の根源の

赦しを問う」のです。

この長い年月に培われた共同体活動のノウハウが福音としてパウロ以降、地中海沿岸に拡がり始め、70年以降の福音書作成運動期にキリスト教として行き詰まった人間社会の扉を新しくこじ開けて世界に向かって発信されたのです。

マザー・テレサの「死に行く人々の家」でボランティアをしていた頃、シスター達は文字通り死に行く人々にこう語りかけました。「神はあなたを誰よりも愛されている」と・・・。

人は目の前に起こる否定的な事柄に全てを奪われるかのようにうろたえます。聞くことも話すことさえも奪われてしまうかのようです。しかし、「そのままが良いのだよ」という寄り添う愛が、人が生きるうえには必要なのです。そこで初めて人は聞くべきことを聞くことと話すべきことを話す者へと育まれてゆくのでしょう。

33節以降の記事は、このようにイエスによる圧倒的な癒し・慰め・励まし・赦しなのです。

わたしたちは受難節の歩みを共にしようとしています。十字架を前にして何を聞き、何を語るべきかをもう一度点検しつつ、愛されている自己を確認したいと願います。